

Title	日本手話の口型にみられるアスペクトと時制の関連性
Sub Title	Interaction of tense and aspect in mouth actions of Japanese sign language
Author	松岡, 和美(Matsuoka, Kazumi)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.56 (2025. 3) ,p.341- 355
JaLC DOI	10.14991/005.00000056-0341
Abstract	口型（口の動き）は、手話言語に広く見られる非手指表現の一種である。その文法的機能が形態・統語・意味・談話の様々な側面に関わることを示唆する様々な現象が報告されているが、日本手話の口型についての詳細な記述はまだ十分には行われていない。本稿では、日本手話の口型の文法的な特性を概観したうえで非手指表現の完了アスペクトを表す二種類の口型を取り上げ、それらの使い分けが時制と連動していることを指摘する。日本手話と中国語の比較を通して、本研究でなされた観察が音声言語・手話言語に関わらず、時制を持たない言語に共通するアスペクト表現の種類の考察に資する可能性を示す。
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000056-0341

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本手話の口型にみられるアスペクトと 時制の関連性

松 岡 和 美

要旨

口型（口の動き）は、手話言語に広く見られる非手指表現の一種である。その文法的機能が形態・統語・意味・談話の様々な側面に関わることを示唆する様々な現象が報告されているが、日本手話の口型についての詳細な記述はまだ十分には行われていない。本稿では、日本手話の口型の文法的な特性を概観したうえで非手指表現の完了アスペクトを表す二種類の口型を取り上げ、それらの使い分けが時制と連動していることを指摘する。日本手話と中国語の比較を通して、本研究でなされた観察が音声言語・手話言語に関わらず、時制を持たない言語に共通するアスペクト表現の類型の考察に資する可能性を示す。

1. 非手指表現の文法的性質：口型の言語学的研究

ろうコミュニティで自然に確立した手話言語の顕著な特徴は、手指以外の身体部位（目・眉・頬・口・頭全体の動きなど）を用いる非手指表現である。手指で表現されている語彙情報は、文全体が伝達する意味内容の限られた一部にすぎない。手指と同時に使用される身体部位および空間の使用により、文法情報を含めた「文」が完成する。手指を含む話者の上半身および周辺の空間使用を併せることで初めて正確に情報が伝わるという点で、手話言語は極めて同時性の高い性質を備えている。非手指表現については、海外に多くの研究成果があり、Herrman and Steinbach (2013), Pfau and Quer (2010), Wilbur (2000), Pendzich (2020) などにまとめられている。例えばHerrman

(2013:39) は、ドイツ手話やオランダ手話のデータに基づき、口型を含む非手指表現は、語彙の一部になり得るだけでなく、形態・統語・意味・談話の様々なレベルで一貫性のある機能を持つと述べている。

非手指表現は情動的または文法的な性質を持つものに分けられる。その二つが本質的に異なる性質を備えていることは、手話を母語とするろう児の頭の動きの研究で示されている。情動的な顔の動き（首ふりなど）は言語に関わらず1歳前後の子どもが使用するようになる反面、アメリカ手話の文法の一部とされる非手指表現は、異なったタイミングで習得される（Anderson and Reilly 1997; Reiley, McIntire and Bellugi 1991）。つまり手話言語の非手指表現は、聴者も用いるような顔の感情表現とは異なるということである。

本稿で取り上げる日本手話とは、ろうの両親のもとに生まれたろう児が出生時から母語として習得する自然言語であり、（声の有無にかかわらず）日本語を話す通りに口を動かしながら補助的に手話単語をつける日本語対応手話（手指日本語ともいう）とは異なる文法的特性を有する（木村 2011; 岡・赤堀2011; 松岡2023）。日本手話もまた、ろう者のコミュニティで自然発生した言語であり、1878年の京都盲啞院の設立以来少なくとも140年以上の歴史があるとされている¹。非手指表現は日本手話にも多く見られ、その言語学的な機能については、韻律（下谷・前川 2023）・統語（岡・赤堀 2011; 松岡 2015, 2023）・意味的特性（Matsuoka and Gajewski 2013; Matsuoka, Yano and Minamida 2013; 松岡2015）などいくつか記述があり、非手指表現の中には統語素性の一形態と考えられるものが存在すると論じた研究もある（Uchibori and Matsuoka 2013）。

手話言語の口型については、欧米を中心に個別言語の記述および言語間比較が行われている（Liddell 1980; Boyes Braem and Sutton-Spence 2001; Crasborn et al. 2008; Herrman and Steinbach 2013; Johnston, Van-Roekel and Shembri 2016 など）。手話言語学が主な研究対象とする口の動きである「マウスアクション（mouth action）」は、音声言語の口の動きを模した「マウジング（mouthing）」

1 手話が無文字言語であることも影響しており、それ以前の言語使用状況を確認できる文献資料は現時点では見受けられない。

と、手話独特の性質を備えた「マウスジェスチャー (mouth gesture)」に大きく二分される (図1)。

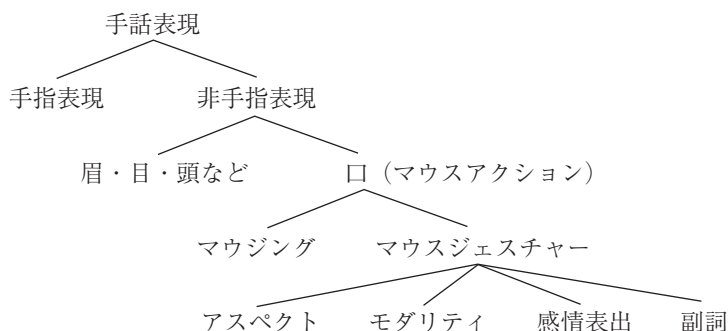


図1 非手指表現の分類

欧米のマウスアクションの分類と、その社会言語学的な特性に関する日本語での概説には、岡田 (2023) がある。日本手話の口型の多様性を網羅する研究成果は限られているが、坂田・矢野・米内山 (2008)、岡・赤堀 (2011)、木村 (2011) に簡潔な記述がみられる。市田 (2005b) は、非手指副詞の一種として動作の様態を表す口型を取り上げている。Matsuoka, Yano and Minamida (2013) は、前述の坂田らや木村が記述した口型の違いを同一の手指表現を用いた例文で検証し、アスペクト・モダリティ・話者の感情表出 (Affect)・程度 (degree) など様々なタイプに分類されるべき口型が十分に区別されないまま記述に混在していることを指摘している。さらに同論文では、段階的形容詞が強調される際に、その形容詞の極性に応じて選択される口型の存在が報告されており、Matsuoka and Gajewski (2013) は、それらを強調辞 (intensifiers) とする形式意味論的な分析を行っている。このような口型も副詞的表現の一種と考えられる。次節で、日本手話のマウスジェスチャーが持つ文法的機能の多様性を概観する。

2. 日本手話の口型（マウスジェスチャー）の多様性

日本手話の口型は、手指で示された語彙と組み合わせられることで様々な意味を伝達する。以下の例文（1）は、話者が友人に出会ったという出来事（命題）を伝える文である。以下、日本手話の例文の後の（ ）内は日本語訳である。

- (1) 友達 __ 口型 会う² （友達に出会う・出会った）

筆者の研究グループによる先行研究（Matsuoka, Yano and Minamida 2013）で記述されているように、述語にあたる部分（ここでは動詞/会う³）に異なる口型が付くことで、別の意味が生じることが日本語の訳文からうかがえる。表1はアスペクトとモダリティに関わる口型である。

口型	タイプ	日本語訳
pa	アスペクト	友達に出会った
po	モダリティ	友達に思いがけず出会った / なぜ出会ったのか？
mm ⁴	モダリティ	予定通り友達に会った

表1 口型で区別される例文（1）のアスペクトとモダリティ

口型paは完了アスペクト表現である。過去の時制表現と異なる点は、この口型がなくても過去のテンポラリティを表現する文が成り立つことである（3節参照）。口型po, mmは、友達に出会ったという出来事が、「思いがけず」「予定通り」など、命題内容の蓋然性について話者が持っている想定に関わる解釈が得られることから、話者の心的態度を表すモダリティ的な性質を持つ可能性が考えられる⁵。

2 日本手話を含む多くの手話言語では時制を表す形態素が観察されない。これについては後の節で詳しく述べる。

3 記号/ /は手指で表現される語彙、線と記号は共起する非手指表現を表す。

4 口型「mm」は、力を入れて口を閉じた表現である。

5 日本手話のモダリティ表現に関しては、10以上の語彙（手指表現）が観察されて

上記のほかに、日本手話で頻繁に見受けられる口型には、話者の肯定的・否定的な感情の表出を示すものも多い（表2）。このような話者の感情を表す表現を、ここではBesnier（1990）にしたがい感情表出（Affect）という用語で記述する。ただ、同じ性質を持つ表現をSaury（1984）は態度的極性（attitudinal polarity）と分類するなど、感情表出に関わる要素を指す用語は個々の研究の目的に合わせて呼称が異なることに注意する必要がある。

pi	感情表出	運悪く友達に出会ってしまって嫌だった
pu	感情表出	予想通り友達に出会ってあまり嬉しくない
pe	感情表出	友達に出会って複雑な気持ちだ

表2 口型で区別される例文（1）の感情表出

口型pi, pu, peは否定的なニュアンスと関連している。中でもpiやpuは、否定的な意味を持つ/壊れる+口型pi/・/少ない+口型pi/・/違う+口型pe/などの語彙を構成する必須の要素になっていることから、口型が持つ否定的な意味が語彙的要素の一部にもなり得ることが観察できる。

上記のタイプに加えて、副詞的な働きをする口型も存在する（表3）。アメリカ手話における同様の表現がLiddell（1980）で報告されており、非手指副詞（non-manual adverbs）と呼ばれている。これらの口型は頭や目の動きなど、他の非手指表現と組み合わせられて特定の意味を示すことが特徴的である。例えば口型uは、とがらせた口と頭のゆらゆらとした動きと同時に現れ、口型mmは眉寄せや頭の静止、全体的に力が入った身体表現と共に起する（市田 2005b; 木村 2011）。

u	副詞	深く考えず
mm	副詞	時間をかけて、注意して

表3 副詞的な口型

いる（Matsuoka, Yano, and Maegawa 2022）。口型で示されるモダリティ的な要素については本稿では扱わない。

市田（2005b）は、口型と頭の位置の組み合わせによってもたらされる様々な意味を考察し、口型が、動詞が表す行為の「妨げ（助け）に対する基本的な対処のしかたを図像的に表現し、頭の位置はその対処時の動作主の姿勢を、やはり図像的に表している（p.96）」と述べている⁶。

この節で見てきたように、日本手話の口型には意味的な多様性があり、アスペクト・モダリティ・感情表出・副詞など、様々なタイプに分類される。次節以降は、日本手話の完了アスペクト表現のうち、特に口型に関わる性質を考察する。

3. 手話言語の時制とアスペクト

日本手話を含む世界の手話言語の多くは、時制を示す文法マーカーを持たない（Pfau, Steinbach, and Woll 2012）。同一の述語表現に対して、過去と非過去の両方の解釈が可能である。ただ、それらの言語においても時間的な意味であるテンポラリティ（日本語記述文法研究会 2007）は存在する。例（2）のように、時制の解釈は、同じ文に現れる副詞や先行文脈からの推測によりもたらされる。

- (2) a. 昨日 田中 来る （昨日、田中が来た）
b. 明日 田中 来る （明日、田中が来る）

時制（テンス）表現がない言語はタイ語・中国語・古典ヘブライ語など多く存在するが、（2）で使われている/昨日/や/明日/のような時の流れを示す副詞はすべての言語に存在するとされている（Smith 2003）。

手指の表現や、手話全体の動きを変化させる表現（Klima and Bellugi 1979）など、手話言語のアスペクトは様々な方法で表現されることが知られている。例えば、Meir（1999）で報告されたイスラエル手話の完了アスペク

6 顔を含む身体の異なる部位が異なる機能を担うという分析は、Matsuoka and Gajewski（2013）の語彙的モダリティと態度モダリティの区別や、Bross（2020）の身体マッピング仮説（bodily-mapping hypothesis）でも試みられている。

トは(3-4)のように手指表現(ALREADY)で示され、過去完了・未来完了の両方の用法がある。

(3) I ALREADY EAT NOW.

‘I have just eaten now.’ (もう食べてしまった)

(4) WEEK FOLLOWING THEY (dual) ALREADY MARRIED.

‘Next week they will already be married.’

(来週には結婚してしまっているだろう)

Meir (1999:45、日本語訳は筆者)

日本手話のアスペクト表現には三つのタイプがある(市田2005a; 木村2011; 松岡 2015)。一つ目は手指表現(形態素)を追加するものである。典型的な例として、進行アスペクトを示す/中/があげられる。この形態素は名詞や動詞⁷に後続することで進行中の動作や状況を表す。

(5) a. /バレーボール 中/

(バレーボールをしているところだ・しているところだった)

b. /書類 作る 中/

(書類を作っているところだ・書類を作っているところだった)

二つ目は手指表現全体の動きが変化するものである(アメリカ手話の類似の事例についてはKlima and Bellugi 1979参照)。下記の例(6)の+++は、縮小された動きの往復を繰り返すことで、食べる動作が継続したこと(継続アスペクト)を示す。

(6) /食べる+++/ (食べ続ける・食べ続けた)

7 手話言語には格や活用を示す表現が観察できないことが多く、音声言語における「品詞」の区別が確認できるかどうかについては議論があるが、本稿での記述の主旨には大きく関わらない。

三つ目は手指表現と口型（口の動き）が共起する例である。手話表現/終わる/が別の動詞の直後に現れ、完了アスペクトの表現として機能する。

(7) /食べる 終わる/（食べてしまった）

完了アスペクトを示す手指表現/終わる/と、口型paは頻繁に共起する。

(8) — pa
/食べる 終わる/（食べてしまった）

また、口型paを動詞と同時に表す方法で完了アスペクトを示すことも可能である。

(9) — pa
/食べる/（食べてしまった）

上の例から、日本手話の完了アスペクトの表現として、手指表現/終わる/と、非手指表現である口型paがあり、この二つは共起可能であることがわかる。次節では、完了アスペクトを示す手指表現/終わる/と共起する二種の口型の生起パターンに過去・非過去の時制情報が関わることを示す。

4. 完了アスペクト口型の生起パターン

日本手話の手指表現/終わり/と共起して完了形を示す口型にはpaとowariの二種類がある。後者のowariは、日本語のマウジング（「オワリ」という口の動き）から生じたと考えられるが、二種のアスペクト口型は、時制と連動して現れるという独自の文法的パターンにしたがう（松岡 2019）。以下の例（10-11）は、口型paと口型owariが過去完了・未来完了で相補分布を成すことを示している。（10）は、ラーメンを食べるという出来事が過去に完了したことを示す文である。文末のアスペクト表現/終わる/と口型paが共起する

が、口型owariは容認されない。

過去完了：口型pa

- (10) a. /昨日 IX₁ ラーメン 食べる 終わる⁸ _____pa
(昨日私はラーメンを食べてしまった・食べた)
- b. */昨日 IX₁ ラーメン 食べる 終わる/ _____owari
(昨日私はラーメンを食べてしまった・食べた)

それに対して、下の例は「明日の午後2時の時点では、私はラーメンを食べ終わっているだろう」という未来時点における完了を表す文である。この文では、前の例とは逆に、口型owariのみが容認される。

未来完了：口型owari

- (11) a. */明日 昼2時 IX₁ ラーメン 食べる 終わる/ _____pa
(明日の昼2時には私はラーメンを食べ終わっているだろう)
- b. /明日 昼2時 IX₁ ラーメン 食べる 終わる/ _____owari
(明日の昼2時には私はラーメンを食べ終わっているだろう)

これらの例から、日本手話の口型paは過去時制、口型owariは未来時制と密接な関わりを持つと考えられる。

日本語や英語の過去形は条件節でも使用可能であるが、口型paについても類似する用法が観察される。日本手話の条件節は、焦点の合わない視線と、頭全体を前に出して固定するような非手指表現で示される。節の終わりのうなずきは「固定の解除」のきっかけとなり、話者はうなずきながら頭を元の中立的な位置に戻す（市田 2005c）。以下の例（12）では、視線と頭の位置の「固定」の表記は省略し、条件節の終わりに生じる「解除」のうなずきを▼で示した。

8 IX₁は、一人称の指さし（Index）を示す。

- (12) a. /もし 今 旅行 保険 入る 終わる/▼ 安心/
 (もし今、旅行保険に入ったら安心です)
- _____pa
- b. */もし 今 旅行 保険 入る 終わる/▼ 安心/
 _____owari

条件節の最後に現れる完了表現と共起できる口型はpaのみであり、口型owariは同じ環境では容認されない。ここでも、/終わる/と口型paの組み合わせが、日本語や英語で「過去形」と呼ばれる表現と似たふるまいをすることがうかがえる。

5. 音声言語との比較

興味深いことに、やはり時制の表現がない言語とされている中国語にも、日本手話の口型と同様に、時制に応じて選択される完了アスペクト表現がある。中国語には、時制に関わりなく使える完了表現「了」の他に、過去完了のアスペクト表現「过」があり、この表現の性質は以下のように記述されている。

「動詞+过」は過去の経験を表すので、必ず過去という時間と関連をもつ。‘動詞+了’は完了を表し、必ずしも過去との関連はない。過去に用いてもよいし、現在・未来に用いてもよい（呂叙湘主編・牛島・菱沼監訳 2003:159）」

以下の例文 (13) の日本語訳に示された通り、「过」は、過去に完了した出来事のみで使用される。

- (13) a. 去年我们游览过长城
 (去年長城に遊びに行ったことがある)
- b. 我们已经游览了长城
 (すでに長城を見終わった)

c. 明天的计划是游览了长城再去参观水坝

(明日の予定はまず長城に行き、それからダムを見学する)

動詞に後続する「过」で表される内容は必ず過去と関連を持ち「現在まで持続しない（前掲 p159)」。以下の例文（14）にあるように、「过」が過去に完了した出来事を表す一方、「了」は現在も継続している状況（現在完了）を表すことも可能である。

(14) a. 他当过班长

(彼は班長になったことがある。今はもう班長ではない)

b. 他当了班长了

(彼は班長になった。今もなお班長である)

日本手話の/終わる/+口型pa (15) は、中国語の (14a) と同じく、過去完了の解釈を受ける。

(15) /IX₃ 班長 ^{_____}pa 終わる/

(彼は班長になったことがある。今はもう班長ではない)

日本手話の/終わる/+口型paが中国語の「过」と同様、過去時制と連動した完了アスペクトの表現である可能性が示唆されている。

本節では、日本手話の手指表現/終わる/に付随する口型にはpaとowariがあり、それらの使い分けが時制と連動することを明らかにした。口型owariは日本語のマウジング由来と考えられるが、未来完了に用法が限定される点、日本語の「終わり」「終わる」と大きく異なる点である。時制による制限を受ける完了アスペクト表現は手話言語に限られたものではなく、中国語にも過去完了を示す「过」がある。この観察は、音声言語・手話言語に関わらず、時制表現がないと考えられてきた言語にも文法的な時制が存在する可能性を示唆するものである。Comrie (1976) は、自然言語では他の時制より

も過去時制においてより幅広いアスペクト情報の区別があることを指摘し (p.72)、時制のない言語 (tenseless language) においては、完了形が過去の解釈を受ける例を論じている (pp.82-83)。もし過去時制と完了形の間に密接な意味的關係があるならば、/終わり/+口型owariで示される未来完了は、時制による口型の交代とは異なる言語現象である可能性も考えられる。

6. おわりに

日本手話では、音声日本語通りの口の動き (マウジング) とは本質的に異なる口型 (マウスジェスチャー) が用いられ、その用法にはアスペクト・モダリティ・感情表出・副詞という多様性が見受けられる。それらのうち、本稿では特にアスペクトに関わる口型について述べた。日本手話の完了アスペクトの手指表現/終わる/と共起する口型 (pa, owari) は時制に応じて選択される。中国語にも同じ生起パターンを示すアスペクト要素があることから、本研究でなされた観察は、音声言語・手話言語に関わらず、時制を持たない言語に共通するアスペクト表現の類型の探求に資するものと考えられる。これらの口型を含めた日本手話のアスペクト体系を明らかにするためには、完了 (perfectives) および未完了 (imperfectives) アスペクトの調査を継続しながら、時制やテンポラリティとの関係を考察する必要がある。また、本稿は口型と手指表現/終わる/の組み合わせで表現される完了アスペクトを中心に上げたが、3節で見たように、日本手話の完了アスペクトに関わる表現において口型と/終わる/の共起は必須ではない。手話のアスペクト体系を理解するにあたっては、より広範囲の言語現象を踏まえた研究が必要である。

謝辞

この研究テーマに取り組むきっかけとなるデータを提示してくださった、日本手話を第一言語とするろう者の皆さまに心からの謝意を表する。数見陽子氏・西脇将伍氏・矢野羽衣子氏には日本手話例文の確認および貴重なコメントをいただいた。ハーバード大学Kathryn Davidson研究室およびコネチ

カット大学手話言語学研究ディスカッショングループ (Sign Linguistics Research Discussion Group) の参加者・平山仁美氏・山崎直樹氏からも重要な情報やコメントをいただいた。ここに謝意を表したい。本研究は、2014-2019年度科研費基盤研究 (B)「手話言語の文法における『非手指要素』の意味的・統語的性質の研究」(課題番号26284061)・2019-2023年度基盤研究 (B)「手話言語における空間と語順のインターアクション：言語学的特徴とその発達」(課題番号19H01259)・2024-2027年度基盤研究 (B)「手話言語における談話的特性とその発生：統語論・意味論との連携と応用」(課題番号24K00064)の助成を受けた。

参考文献

- Anderson, Diane E., and Judy S. Reilly. 1997. The puzzle of negation: How children move from communicative to grammatical negation in ASL. *Applied Psycholinguistics* 18.4. pp.411-429.
- Besnier, Niko. 1990. Language and affect. *Annual Review of Anthropology*. pp.419-451.
- Boyes-Braem, Penny, and Rachel Sutton-Spence. 2001. *The Hands are the Head of the Mouth: The Mouth as Articulator in Sign Languages*. Hamburg: Signum-Verlag.
- Bross, Fabian. 2020. *The Clausal Syntax of German Sign Language: A Cartographic Approach*. Berlin: Language Science Press.
- Comrie, Barnard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crasborn, Onno, Els van der Kooij, Dafydd Waters, Bencie Woll and Johanna Mesch. 2008. Frequency distribution and spreading behavior of different types of mouth actions in three sign languages. *Sign Language & Linguistics*, 11 (1), 45-67.
- Herrmann, Annika. 2013. *Modal and Focus Particles in Sign Languages: A Cross-linguistic Study*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Herrman, Annika and Markus Steinbach. Eds. 2013. *Nonmanuals in Sign Language*. Amsterdam: John Benjamins.
- Johnston, Trevor, Jane Van Roekel, and Adam Schembri. 2016. On the conventionalization of mouth actions in Australian Sign Language. *Language and Speech* 59.1, 3-42.
- Klima, Edward and Ursula Bellugi. 1979. *The Signs of Language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Liddell, Scott. 1980. *American Sign Language Syntax*. Hague: De Gruyter.
- Matsuoka, Kazumi and Jon Gajewski. 2013. The polarity-sensitive intensifier mouth gestures in Japanese Sign Language. *Journal of Japanese Linguistics* 29, 29-48.
- Matsuoka, Kazumi, Uiko Yano, and Masahiro Minamida. 2013. Grammatical functions of

- mouth gestures in Japanese Sign Language. In Leah C. Geer. Ed. *Proceedings from the 13th meeting of the Texas Linguistics Society*. pp. 45-54.
- Matsuoka, Kazumi, Uiko Yano, and Kazumi Maegawa. 2022. Epistemic modal verbs and negation in Japanese Sign Language. In Kazumi Matsuoka, Onno Crasborn and Marie Coppola. Eds. *East Asian Sign Linguistics*. Berlin: Walter de Gruyter. 137-167.
- Meir, Irit. 1999. A perfect marker in Israeli Sign Language. *Sign Language & Linguistics* 2.1, 43-62.
- Pendzich, Nina-Kristin. 2020. Lexical Nonmanuals in German *Sign Language: Empirical Studies and Theoretical Implications*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Pfau, Roland, Markus Steinbach, and Bencie Woll. 2012. Tense, aspect, and modality. 2012. In Roland Pfau, Markus Steinbach, and Bencie Woll (eds.) *Sign Language: An International Handbook*. pp. 186-204. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Pfau, Roland, and Josep Quer. 2010. Nonmanuals: their grammatical and prosodic roles. In Diane Breantari (ed.). *Sign Languages*. 381-402. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Reilly, Judy S., Marina McIntire, and Ursula Bellugi. 1991. Baby face: A new perspective on universals in language acquisition. *Theoretical Issues in Sign Language Research* 2. 9-23.
- Saury, Jean-Michel. 1984. Polarity and the Morpheme: A New Analysis of the Morphemes- Lös and Fri in Swedish. *Gothenburg Papers in Theoretical Linguistics* 47.
- Smith, Carlota S. 2003. Tense and aspect. In Lynn Nabel. Ed. *Encyclopedia of Cognitive Science Volume 4*. pp. 361-367. London: Nature Publishing Group.
- Uchibori, Asako and Kazumi Matsuoka. 2013. Split movement of wh-elements in Japanese Sign Language: A preliminary Study. *Lingua* 183, 107-125.
- Wilbur, Ronnie. 2000. Phonological and prosodic layering of nonmanuals in American Sign Language. In Karen Emmorey and Harlan Lane. Eds. *The Signs of Language Revisited: An Anthology to honor Ursula Bellugi and Edward Klima*. 215-244. New York: Psychology Press.
- 市田泰弘. 2005a. 「手話の言語学第5回 時間・空間と手の運動—日本手話の文法(1) 「アスペクト」ほか」『月刊言語』34(5). 92-99.
- 市田泰弘. 2005b. 「手話の言語学第8回 頭の位置と口型—日本手話の文法(4) 「知覚動詞・思考動詞、非手指副詞」」『月刊言語』34(8). 92-99.
- 市田泰弘. 2005c. 「手話の言語学第9回 頭の動き・位置と顔の表情—日本手話の文法(5) 「文タイプと従属節」」『月刊言語』34(9). 94-101.
- 岡典栄・赤堀仁美. 2011『文法が基礎からわかる 日本手話のしくみ』東京:大修館書店.
- 岡田智裕. 2023. 「マウス・アクション」松岡和美・内堀朝子(編著)『手話言語学のトピック: 基礎から最前線へ』pp. 249-277. 東京: くろしお出版.
- 木村晴美. 2011. 『日本手話と日本語対応手話(手指日本語): 間にある深い谷』東京: 生活出版.

- 坂田加代子・矢野一規・米内山明弘, 2008.『驚きの手話「パ」「ポ」翻訳 翻訳で変わる日本語と手話の関係』大阪：星湖舎.
- 下谷奈津子・前川和美, 2023.「プロソディ」松岡和美・内堀朝子（編著）『手話言語学のトピック：基礎から最前線へ』 pp. 53-80. 東京：くろしお出版
- 日本語記述文法研究会, 2007.『現代日本語文法 3 第 5 部アスペクト 第 6 部テンス 第 7 部肯否』東京：くろしお出版.
- 松岡和美, 2015.『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』東京：くろしお出版.
- 松岡和美, 2019.「日本手話における時制と連動した非手指アスペクトマーカの予備的研究」日本言語学会第 158 回大会口頭発表. 一橋大学.
- 松岡和美, 2023.「ろう児の発達における日本手話の重要性」佐野愛子・佐々木倫子・田中瑞穂（編）『日本手話で学びたい！』 pp. 25-39. 東京：ひつじ書房.
- 呂叔湘（主編）, 牛島徳次・菱沼透（監訳）, 2003.『中国語文法用例辞典—《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』. 東京：東方書店.

